

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(共同制作支援事業)

成果報告書

事業（公演）名	共同制作オペラ モーツァルト歌劇「ドン・ジョヴァンニ」（新演出）
代表団体名	東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
劇場・音楽堂等の名	オーバード・ホール、東京芸術劇場、熊本県立劇場
実演芸術団体等の名	オーケストラ・アンサンブル金沢、読売日本交響楽団、九州交響楽団
内 定 額	44,782 (千円)

事業概要

(1) 事業の概要

趣旨・目的、ニーズ等
<p>モーツァルトの最高傑作のひとつでもある「ドンジョヴァンニ」を総監督の井上道義氏が台本制作、日本語訳を行い、上演することで、内容的にもダイレクトに聴衆に訴えかける言葉の力を最も発揮することが可能となる稀有の機会となる。</p> <p>今回、我が国を代表するダンサー振付家の一人である森山開次氏が自身初めてのオペラ演出に挑戦することとなった。国内外での大きな評価を得る森山氏は、オリジナルの台本作家であるダポンテが意図した価値観を咀嚼し、自身の経験から本作品の慣例にとられない、新たな視点から演出することが可能な人材といえる。</p> <p>また、森山氏自身が自身の信頼する同世代の中堅舞台プランナーを選抜。各地の舞台関係者との協働により作り上げることで、参加劇場のテクニカル人材面でも連携を図る。実施各地で選抜する合唱団と地元オーケストラが出演することで高品質な日本ならではのオペラを通じ、各地域における芸術文化機会の創出、地域間連携を図ることで未来につながる舞台作りを実現する。公募オーディションを経た、日本を代表する若手、中堅歌手の育成に努める。また、各種バリアフリー化、多言語化に取り組み、障害者を含む、不特定多数の国民、外国人が来場しやすい環境整備にチャレンジすることで劇場法の精神に則り、地域に開かれたアーツセンターの役割を公演を通じ果たしていく。</p>
実施日時・実施会場（所在地）・実施回数
<p>2019年(3都市4公演)</p> <p>(1)1月20日(日) オーバード・ホール 主催：(公財)富山市民文化事業団、富山市、(公財)石川県音楽文化振興事業団(オーケストラ・アンサンブル金沢)</p> <p>(2)1月26日(土)、27日(日) 東京芸術劇場コンサートホール 主催：東京芸術劇場((公財)東京都歴史文化財団)、(公財)読売日本交響楽団</p> <p>(3)2月3日(日) 熊本県立劇場 演劇ホール 主催：(公財)熊本県立劇場、(公財)九州交響楽団 (※最大有効座席：富山=1600席、東京=3360(2公演)、熊本=950)</p>
演目・曲目、幕構成、主な出演者、主なスタッフ、あらすじ等
<p>モーツァルト歌劇『ドンジョヴァンニ』全幕 総監督・指揮：井上道義 演出：森山開次 美術：柴田隆弘 衣裳：廣川玉枝 照明：櫛田晃代 代 演出補：太田麻衣子 振付助手：美木マサオ 副指揮：辻 博之 コレペティトール兼音楽コーチ：服部容子 他</p> <p>ドンジョバンニ：ヴィタリ・ユシュマノフ、レポレッコ：三戸大久、ドンナ・アンナ：高橋絵理、騎士長：デニス・ビシュニャ ドンナ・エルビーラ：鷲尾麻衣、オッターヴィオ：金山京介、ツェルリーナ：小林沙羅、藤井玲南（東京1公演） マゼット：近藤圭、 ダンサー：浅沼圭 碓井菜央 梶田留以 庄野早冴子 中村里彩 引間文佳 水谷彩乃 南帆乃佳 山本晴美 脇坂優海香 合唱：Giovanni Ensemble Toyama、東響コーラス、ラスカーラ・オペラ合唱団 管弦楽：オーケストラ・アンサンブル金沢、読売日本交響楽団、九州交響楽団 プロデューサー：藤田充博（オーバード・ホール）、中村よしき・横堀応彦（東京芸術劇場）、佐藤奈々絵（熊本県立劇場）</p>

事業（公演）の特徴、鑑賞者利用者拡大のための工夫点又は戦略等
<p>公募オーディションによりソリストを選抜し、我が国を代表する中堅ソリスト及び我が国に在住し活躍する外国人演奏家（日本語可）を起用した（ダンサーも森山氏によるオーディション実施）。合唱団は開催地の地元合唱団、管弦楽も地元プロオーケストラを起用し協働することで、地域文化に根差した活動の活性化、ホール・地域の地域における文化拠点形成、といった観点から大きな芸術的かつコミュニティの創出を含め、実りにつながるようにした。さらに舞台スタッフも各地の劇場職員をツアースタッフとして関わるように行った。また、総監督の井上道義氏が日本語台本、歌詞を制作し、言葉の面でもバリアフリー化を図り、視覚障害者をはじめ、健常者も字幕に依存することなくダイレクトに聴衆に言葉と音楽が届くような工夫を行うことでオペラファンの拡大を具体的に図った。また英語字幕を作成し、オリンピック・パラリンピックへ向け、外国人聴衆の拡大、普及に対応するべく努力した。聴覚障害者向けに補聴機能となる磁気ループを全参加館で設置することでのバリアフリー化も図った。また、今回熊本地震被災地である熊本県立劇場が参加することから、市内、近隣などでの出演者によるアウトリーチを参加館が連帯、協働し実施することで復興支援の一助とした。具体的には、仮設住宅集会所での出演者によるミニコンサート、さらに印刷物などの発注を被災地の地元企業へ発注することで経済面でも支援の志をもって実施した。</p>
共同制作を行う劇場・音楽堂等、実演芸術団体
<p>オーバード・ホール（富山市芸術文化ホール、公益財団法人富山市民文化事業団）、東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、熊本県立劇場（公益財団法人熊本県立劇場） オーケストラ・アンサンブル金沢（公益財団法人 石川県音楽文化振興事業団）、読売日本交響楽団（公益財団法人 読売日本交響楽団）、九州交響楽団（公益財団法人九州交響楽団）</p>
共催者・協賛者・後援者・関係機関
<p>富山公演 共催：北日本新聞社、北日本放送、FMとやま 熊本公演 後援：熊本日日新聞社、NHK熊本放送局、FMK、KKT、FM791 助成：公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団 *全公演 協力：劇場、音楽堂等連絡協議会（広報協力） ローランド株式会社（チェンバロ提供）</p>

（２）事業の目標値、実績値

実施会場	実施日程	入場者・参加者数	
		目標	実績
オーバード・ホール	2019年1月20日（日）	目標	1,000
		実績	1,014
東京芸術劇場コンサートホール	2019年1月26日（土）、27日（日）	目標	2,300
		実績	2,872
熊本県立劇場 演劇ホール	2019年2月3日（日）	目標	894
		実績	727
		目標	
		実績	
		目標	
		実績	
事業の目標値、実績値		目標	4,194
		実績	4,613

【妥当性】

自己評価

共同制作支援事業の意図や役割分担など事業が適切に組み立てられた（と認められる）か。

3劇場が持ち回りで開催した共同制作会議において、各劇場の役割分担を次のように取り決めた。
○東京芸術劇場（幹事館）…共通経費のとりまとめ及び指揮者、演出、ソリストに関わる交渉連絡関係、オーディション実施、記者会見実施等
○オーバードホール…ツアー旅費宿泊費に関するとりまとめ及び支払い手配、ダンサーに関わる連絡関係、報告書の作成
○熊本県立劇場…各種広報、宣伝（チラシ、プログラム作成、共通の広報等）
各劇場が責任をもって協働し、プロジェクト進行に関して密な情報共有を行ったことで、大きな事故もなく適切なプロジェクト運営を行うことが出来た。また2019年1月の立ち稽古開始以降は3劇場の制作スタッフがローテーションを組み、立ち稽古に参加し運営を行った。また舞台技術者（劇場職員）が3都市でのツアーに技術スタッフとして参加した。これによりそれぞれが責任を等しく分担することが出来た。以上の運営方法を実現することにより、共同制作支援事業の理念に基づいた理想的な運営体制と役割分担を当初の計画から大きな齟齬なく実施することに成功したと自負している。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

先述の役割分担に基づき、北陸、関東、九州という遠隔地域の劇場が協働したことにより、単独ではなし得なく、パッケージではない、内容的に独創性の高い創造発信につながる最高品質のオペラ上演、地域の文化力を著しく向上させる効果が可能となった。これは2009年の「トゥーランドット」以来、毎年実施している全国共同制作プロジェクトの成果であり、今後も継続していくべき文化的意義を有した事業であると確信している。
また今回は日本語上演を通じてのバリアフリー化のみならず、公演の際に磁気ループを初めて導入し、聴覚障害者が来場しやすい環境整備を行った。さらに英語字幕を作成することで、オリンピック、パラリンピックへ向け、多言語化対応を図るなど我が国で独自のオペラ制作を行う社会的意義を具現化した。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

本事業における目標を次のように設定し達成した。それぞれの結果が達成された根拠は事業報告書に示しており、以下〔 〕内は事業報告書の該当ページ数を示す。

【1】参加するホール間の連携交流や協働を通じ、劇場制作・舞台技術スタッフの養成を図る。
⇒制作スタッフの協働に加え、劇場技術スタッフが立ち稽古から全日程に参加し、今までにない劇場技術職員の養成に寄与した。〔p. 16〕

【2】参加各地域のオーケストラ、合唱団を起用し、地域活性化と普及啓発に繋げる。
⇒各地域でコーラスを起用することで地域音楽文化の活性化を図った。地元地域のプロオーケストラとの交渉を行うことで協力関係を築いた。〔pp. 13-15〕

【3】各館が興行リスクに責任を持ち、チケット販売の経験を深めることで、将来的なアーツセンター機能の活性化の一助とする。
⇒3都市ともに目標を概ね達成し、劇場としての機能強化につとめることが出来た。〔pp. 13-15〕

【4】当オペラ参加を機に今後、劇場同士の連携が深まり、協力して行く素地を醸成する。
⇒今回参加した3館を中心に、2021年度以降新たなプロジェクトに取り組む計画を立てている。〔p. 16〕

【5】公平な公募オーディションにより若手・中堅の出演者を起用し、作品制作を通じた人材育成を図る。
⇒ともに時間を共有し、一つの作品を粘り強く作り上げたことで10年後の我が国のオペラ界を牽引する人材を育成することが出来た。〔pp. 7-12〕

【6】地域住民に感動と幸福を実感、共有できる内容の公演を目指す。
⇒限られた制作費の中で様々な工夫を凝らし、他では見ることのできない独自性が高く、かつ我が国で上演する意味のある日本語上演プロジェクトとして成功した。〔pp. 13-15〕

【7】オペラ初心者や若年層へ向けた、アウトリーチ等々を実施。鑑賞者の拡大を目指す。
⇒10月には熊本地震の被災地コンサートなどで観衆拡大等々を実施したほか、各地の高校生をモニターとして招き、好意的な感想を得た。〔pp. 13-15、17〕

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【事業期間】

当共同制作オペラシリーズでは2009年の「トゥーランドット」以来、限られたリハーサル期間の中で最大限の成果を上げる作品制作を目指してきた。この間には様々な試行錯誤があったが、平均して約2~3週間の稽古期間の中で集中的にリハーサルを行うことを基本としている。今回のプロジェクトでも当初の計画では約3週間のリハーサル期間を設けたが、プロジェクトを進行する中で「日本語上演」「オペラとダンスの邂逅」という2つの挑戦的な試みを行うことに対し、その期間だけは不十分であるという話し合いがなされ、予定よりも早い時期からマエストロ及び音楽ヘッドコーチによる音楽稽古、森山氏による振付稽古が行われることになった。入念な下準備を行った上で立ち稽古が行われたことにより、最終的には集中度（≒効率性）の高いリハーサルを行うことができた。

「新しい挑戦のためには、時間が必要である。このことは、今後の本プロジェクトの課題とすべきだ。」と森山氏が指摘しているように（*1）、事業期間の効率性を求める制作サイドの思惑はアーティストに多大な負担を強いるものである。次年度以降もアーティストとの信頼関係を第一に考えつつ、プロジェクトの適正規模とリハーサル期間の関係について慎重に検討しながら計画を進めていく必要がある。

【事業費】

各費目内での増減はあったものの、総予算としては当初の予算額に対して+0.3%の決算額となり、当初の計画通りに実行することが出来た。決して潤沢な制作費があるわけではないが、限られた予算の中で様々な工夫を凝らしたことで、来場者から「2~3万円する来日公演より見応え聞きごたえがある」（*2）と評された公演を安価なチケット料金で提供することができた。

以上の結果から、アウトプットに対して事業期間ならびに事業費は適切であり、当初の計画通り進行したものと考える。

（*1）事業報告書p.7

（*2）事業報告書p.15（熊本公演アンケートより）

【創造性】

自己評価

我が国の実演芸術水準を向上する牽引力となることが期待できる国際的水準の公演であった（と認められる）か。

本公演は2015年に共同制作支援事業として実施した『フィガロの結婚』（全国10都市での共同制作）を成功に導いた井上道義氏を再び指揮・総監督に迎えてスタートしたプロジェクトである。井上氏は長い間、昨今の我が国のオペラの潮流である原語上演とは異なり、「日本語によるオペラ上演」を行うことで聴衆にダイレクトに作品の本質や作品意図を伝える上演を目指してきた。ヨーロッパの文化的首都には、ウィーンのリッパルツオーパーやロンドンのイングリッシュナショナルオペラなど「母国語でのオペラ上演」を行う歌劇場が存在しており、今回国内3都市において「日本語でのオペラ上演」を行ったことは我が国の国際的実演芸術水準を向上させたと考える。

また今回は井上氏の指名により、我が国を代表するダンサー・振付家である森山開次氏に演出を依頼した。初めてのオペラ演出となった森山氏は、原作の台本作家であるダ・ポンテが意図した価値観を独自の視点から咀嚼し、自身が信頼する同世代のクリエイターと協働作業を行う中で、これまでの慣例にとられない新しいオペラ演出の可能性を見出すことに成功した。

出演者に関しては、公平な公募オーディションによりやる気のある実力が伴う若手中堅ソリスト、ダンサーを主力本位で起用し、長い拘束期間に耐えられるギャラを保障することで一定期間作品に集中して対峙することが可能となった。これにより、10年後の日本のオペラ界を牽引するアーティスト人材育成につながる結果を生み出したと確信している。

「オペラの日本語上演の魅力と可能性を証明していた」（*1）と評されるなど、本プロジェクトは諸外国の歌劇場で行われている「母国語でのオペラ上演」が日本でも行われる価値があることを示したものであり、劇場法の理念に則った国際的なアーツセンター機能の強化に資するものであったと考える。

（*1）松岡和子氏による評（2019年2月12日、日本経済新聞夕刊）

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながった（と認められる）か

【1、理想的な共同制作を目指して】

2019年1月の立ち稽古開始以降は3劇場の制作スタッフがローテーションを組み、立ち稽古に参加し運営を行ったこと、舞台技術者が3都市でのツアーに技術スタッフとして参加したことで、それぞれがオペラ制作経験を共有し、制作スタッフ、技術スタッフの技能向上、将来の劇場人材の育成を通じ、劇場法の理念を具現化すべく、各地域での活動に還元していくことを目指し、理想的な運営体制と役割分担を実現することが出来た。その結果、各地域住民等へクオリティの高い公演の提供という点で還元することが出来た。

【2、多言語化対応】

多言語化対応として、通常のオペラ公演に比べて外国人が相対的に多く来場していた事実は当助成の大きな効果であると感じている。多言語化のために作成した英語字幕は外国人に限らず、一般聴衆にとっても内容理解の手助けになったとの意見が数多くあったことは予想外だった。さらにアンケート結果に見られるように音楽に徹底的に寄り添ったダンス及び日本語上演の形態は、日ごろ日本語上演に批判的な昨今の我が国のオペラ上演のあり方に一石を投じたと考えている。これこそが他とは異なる本プロジェクトの存在意義であった。

【3、感動と幸福を実感できるオペラ公演】

国内で独自に共同制作するプロフェッショナルなオペラとして、多大な経費を掛けずとも、世界に伍していくことのできる最高品質のオペラ上演をアーティストと共に工夫しながら実施していくことで地域住民が感動と幸福を実感できる内容の公演を提供することに成功した。これにより、観客と制作に関わった人達のみならず、連帯した各劇場の舞台スタッフ、広報スタッフを含めた感動に繋がっている。この感動が豊かなグローバルイノベーションを持つ日本国民を増やしていくと確信している。

上記3点の特徴により、本事業は当該劇場の国内外での評価の向上につながる結果をもたらしたと考える。